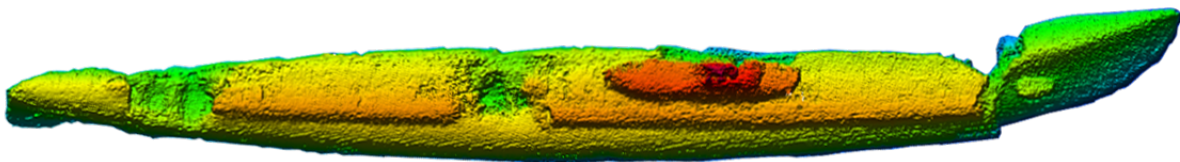


USS Grayback (SS-208)

Japanese Press Release

海洋開発者ティム・テイラー率いる “ロスト52プロジェクト” チームは、 80名の乗員の眠る 第二次世界大戦のアメリカ潜水艦グレイバック号を 日本沿海で発見した。



ニューヨーク州、ニューヨーク市 発： 2019年11月11日

第二次世界大戦のアメリカ潜水艦グレイバック号(SS-208)を、海洋開発のベテランでティブロン・サブシー社のCEOティム・テイラー氏と、彼の率いる“ロスト52プロジェクト”チームが日本沿海で発見した。このことはアメリカ海軍により公式に確認された。発見日時は2019年6月5日、水深は1,427フィート、435mである。グレイバック号は、日本沿海で発見された初めてのアメリカ潜水艦であって、そこは80名の乗組員の安息の地である。

この潜水艦は、ティム・テイラー氏と氏の‘ロスト52プロジェクト’チームが発見した5隻目の潜水艦である。この発見報告は、今日の水中技術分野の最先端に於いて先駆的なロボティクス技術と探査方法を用い、自航式の水中探査装置(AUV)と、遠隔操作の探査装置(ROV)を組み合わせ、さらに先進的なフォトグラメトリー（3次元映像化）技術を駆使した結果であり、最大限に包括的な歴史的考古学記録をもたらしたものである。

NHHC(海軍歴史遺産司令部)の水中考古学部の部長、ロバートS. ネイランド博士は次のように語った。“この革新的なプロジェクトから得たデータと画像は精確で、それで私たち司令部の水中考古学班はグレイバック号の最終安息地点を確定することができました。米国海軍の沈没艦艇の位置を確定するという事は、私たちの水兵らの安息の地を外部から保護し、保全することを保証するという事です。”

グレイバック号は米海軍のタンバー級の潜水艦で、先の大戦で最も戦果を挙げた潜水艦のうちの一隻であった。1941年1月31日に就役し、沈没時は艦長ジョンアンダーソンムーア少佐の指揮下にあった。通算10回の戦時哨戒を行ない、14隻63,835トンの敵船を沈めた。その中には日本軍の潜水艦もある。太平洋戦争のごく初期から、潜水艦に

よる攻撃の主戦力としてあった。

話題として第5回の戦時哨戒では、ハリー・B・ロビー衛生兵が、医学雑誌を頼りに、W. R. ジョーンズ水兵の盲腸手術をして成功した。

この時ロビー衛生兵を補助したジェッセ・A・デイビス・ジュニア大尉は、同じ哨戒中に、バートン・M・ブルック砲術長と共に、ソロモン諸島ムンダに不時着した陸軍のB-26マローダー爆撃機のパイロットを6名救出した。この救出作戦は、筏を船から1.5マイル（2.4km）漕いで陸岸に渡り、日本軍のパトロールを避けながら、ほとんど丸一日かけて行なった。

戦後の日本の記録には次のように書かれている。1944年2月26日にグレイバック号を、東シナ海で日本海軍の基地航空機が攻撃して損傷させた。だが、翌日[1944年2月27日]、グレイバック号は日本軍の運送船セイロン丸を撃沈したものと推定される。同じ日に日本海軍の艦上攻撃機が東シナ海で浮上航走中の潜水艦を発見し、攻撃したと記録している。報告によればこの潜水艦は、「爆発し、轟沈した。」日本軍は、さらに対潜哨戒艦艇を差し向け、はっきりと気泡の筋が残る一帯に爆雷攻撃を行ない、その結果夥しい油が海面に流れ出た。

グレイバック号は戦功により、第7、第8、第9、第10回の戦時哨戒について2度海軍殊勲部隊章を受章した。加えて、8個の従軍星章を受章した。

太平洋艦隊潜水艦部隊司令官ブレイク・コンバース中將は次のように語っている。“グレイバック号の発見は、我々の自由を守るために献身的によく戦った勇敢な水兵たちを讃える、またひとつの機会である。彼ら無私に任務に専念した潜水艦乗組員は、勇敢さの伝統を残した。そして我々もまた、その勇敢さの伝統を全うするべく日々努め、アメリカ海軍の次の世代の潜水艦乗組員への規範としている。”

この遠征探査の準備にあたり、チームの日本人歴史研究家岩崎裕氏が一次資料の再翻訳と位置特定を行ない、戦後1946年に書かれた資料の経度情報が違っているのに気づいた。この元々の間違いは75年間、'ロスト52チーム'の発見までそのままだった。岩崎氏は日本軍の攻撃記録を新しく見出して英訳し、それで探査チームは探査範囲を沖縄の南西海面に再設定した。そして2019年6月5日、従来の第二次大戦の歴史資料の位置から100マイル（160km）離れた海面で、チームは最後の調査区域の最後の調査線で、グレイバック号をみつけた。

テイラー氏は次のように語った。“まったくびっくりだったよ。われわれはすっかりあきらめて、今年の探査予定範囲を全部は見ずに港に帰るところだったんだ。AUV(遠隔操縦探査機)は、ちょっとした故障があって早々に船に戻っていた。それで解析するソナーデータは自航航跡で数本分しかなかった。チームが最後の計測データの切れっ端をスクリーンで流して見ていた時、皆はさっさと船の帰還準備を始めようとそわそわしてたよ。そしたら計測データの最後の区間の最後の1本で、モニターにグレイバックが現れたんだ。”

NHHCのネイランド博士はまた、次のようにも語っている。“海底の軍艦を発見することは、どの船についても、私たちの水兵らの任務遂行ぶりを思い出し、讃える機会です。彼らの家族や戦友たちの方々には、彼らが眠る場所を知って、ある程度、慰めとなるでしょう。また、私たちは沈没時の状況をより詳しく知ることができます。”

”私たちは、ティム・テイラー氏のチームが行なった尊敬すべき自発的な事業の成果に感謝し、また私たちの歴史を振り返り、讃える機会をもたらしてくれた事に感謝します。”

グレイバック号探査事業は、進行中の“ロスト52プロジェクト”の一部で、'ステップ・ベンチャー'チームの支援も一部受けている。また日本のJAMSTEC（日本海洋研究開発機構）も、この事業を日本沿海での最初で、かつ最大限に包括的な水中考古学探査であると認知している。

<https://www.youtube.com/watch?v=vb1988l4Y7w>

